巡礼者に見られるスピリテュアリティの諸次元

——現代坂東巡礼者調査データの多変量解析からの展望——

坂　田　正　顕

序

本論の目的は、2006年にわれわれが実施した現代坂東巡礼者にたいする調査結果から、巡礼者の意識や行動に見られるスピリテュアリティに関するいくつかの重要な実証的な傾向を吟味することを通して、スピリテュアリティ概念に関するいくつかの知見を提示することである。すなわち、坂東巡礼者に関する洞察から、現代日本の巡礼者のスピリテュアリティに関する知見、ひいては、スピリテュアリティ一般に関する理論の精緻化に向けた一つの方向付けの可能性を模索することである(1)。

現代日本巡礼文化においては、四国遍路であれ、坂東巡礼であれ、それぞれ大師信仰や観音信仰などの制度的・伝統的な宗教的動機から巡礼を実践する伝統的巡礼者もなお一定程度存在する。だがしかし、こうした古典的範疇をこえる様々な動機や背景を持つ新しいタイプの巡礼者がますます増加しつつある傾向は否めない(2)。他方、このような傾向は、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼やイギリスのリンディスファーン巡礼やカスバートの道を巡る巡礼のように、グローバルな規模においても同様に見られる傾向である(3)。非伝統的・脱宗教的な新タイプのこれら巡礼者に関する考察は、現代巡礼文化理解の要諦のひとつともなっているのである。そして、これら新タイプの巡礼者を一まとめに「スピリテュアルな」巡礼者として一括できるかどうかはさておいて、その中核部分をスピリテュアリティ型の巡礼者としてみることは、星野（1999、2004）、河野（2006）、早稲田大学道空間研究所（2007）などの諸研究からみて、首肯できるものであろう。

一方、「スピリテュアリティ（spirituality）」に関しては、Heelas, P.（2002）をはじめ、これまで多数の研究者から、宗教概念の再検討とも関連してきわめて活発な議論が展開されてきている。その問題提起の過程をここで仔細に検討する紙幅はないが、大谷（2004：14）の言うスピリテュアリティの実体論的定義あるいは機能的定義のいずれであれ、本概念を巡ってはなお検討の余地が少なくない。本論では、スピリテュアリティの理論的水準からではなく実証的な水準から、これを規定していると思われる隠れた次元のいくつかを明らかにして、概念精緻化に向けた手掛かりを得ることを狙いとしたい。

たとえば、Heelas（2002：358）は、「神聖なるものを日常生活に遍在するものとして経験すること」と規定しているし、Beckford,J.（2003：72）はWuthnow（2001：307）を参照しつつ「神聖なるものとの個人の関係の質、ないし“日常的に経験されるものとしての生活を超えた上位の現実を知覚する感覚”」または「自らの本来の“自己”を自由に選択して表出するものとしのスピリテュアリティ」ともしている。他方、日本の研究者の場合、たとえば、樫尾（2004：166）はスピリテュアリティを「自己が個を越えた何ものかとつながり、それが働いている感覚」と定義し、伊藤（2004：29）はこれを「おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）との神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすること」と定義している。このように、スピリテュアリティに関する定義は、神聖性や神秘性の強調の程度やその内容、あるいは自己や個人による選択性に関する強調の程度やその内実に関して必ずしも一定していない。とりわけ、「自己」概念や「神聖性」観念に関しては、宗教的文化圏の相違も看過できない点であろう。

ここでは、多くの概念規定にみられ、とりわけ日本の研究者の場合に顕著に認められる、①「個を越える」ないし「手の届かない」性質、②「つながり」、③「感覚」という三つの基本的構成要素にまず着目したい。この3次元は、スピリテュアリティ概念規定の原子語のような位置を占めているように思われる。このうち、①は、システム論的タームで言えば、準拠システムの定立ないしシステム＝環境分節化に関する次元であり、同位システムや上位システムなどのシステム外部環境に対して持つ境界付けに関する次元である[(4)]。もっとも「自己宗教」を強調するコンテキストでは、準拠システムの内部環境にも鋭く通底していることが重要視されよう。いずれにしても個的システムが内部／外部に対して開かれていることが前提にされる。他方、②は、環境とシステム、もしくは個的システムと他システムと間の関係性の次元に位置する要素である。この場合、「つながり」の内実が問題とされよう。たとえば、相互に同位水平的にリンクするのか、あるいは上位垂直的に包み込まれるのか、または完全に一体化するのか等々である。なお、「つながり」の「神秘性」に関しては、文化や個人に応じて相対的であり、むしろ、③の感覚の性質に関連するものであろう。そして、その③は、準拠システムによる自立的で主体的な情報処理の次元のものである。スピリテュアリティの場合、情報処理の認知・評価・指令の3段階のうち、認知と評価レベルに焦点があるだろう。とくに「神秘性」が強調される場合は、評価レベルの情報処理に力点が合わされている。むろん、このスピリテュアリティにおける情報処理は、非制度的・非伝統的・脱宗教的で個人的・主体的な文脈に照準が合わされていることは言うまでもない。

さらに、本論での分析焦点については、以上の3要素のうち、①の次元、すなわち、「個を超えた“何ものか”」あるいは、「手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）」などと規定されている部分に置いてみたい。この特性は、いわゆ

るニューエイジに典型的な「ホーリスティック」で多次元的な傾向に属しており、きわめて多様でつかみどころのない「個を超えて、手の届かない存在」とされ、これとの「つながり」が強調される[5]。しかし、その内実の特徴や構造に関してはなお詳らかではない。「個を超える何ものか」は、ある方向へ収斂するような一様的で普遍的な存在でもあり、逆に、むしろ多次元的に拡散する多様的な存在でもあるようでもある。この存在について、さらに議論を深める必要があるように思われる。

本論では、現代坂東巡礼者というごく限られたタイプの対象者を素材にするものではある。しかし、彼らにとっての「個を超える存在」の中身を実証的に仔細に問うことにより、スピリテュアリティ概念を構成する諸次元についての議論の精緻化に向けて一つの指針を引き出すことができる可能性はあろう。「宗教からスピリテュアリティへ」というHeelas的文脈からすれば、現代巡礼はその格好な舞台を提供するものである。四国遍路であれ、サンチャゴ巡礼であれ、「信仰を持っていない」と自認する人々が、「自分探し」に伝統的な制度的宗教空間をいわば借り物にして巡礼の旅に出るという典型的光景は、そのことを端的に物語っているように思われる。本論の狙いは、まさにこの点にある。

その手順として、以下でははじめに、坂東巡礼の特徴と、現代坂東巡礼調査についてその概要を説明し、調査データの特異性について確認した上で、林の数量化Ⅲ類によるデータ解析の結果を提示し、その帰結が意味するスピリテュアリティにおける「個を超える存在」の特徴と構造について検討を試みる。

Ⅰ　現代坂東巡礼の特徴と坂東巡礼者調査の概要

坂東巡礼は、通常、「坂東三十三所観音巡礼」とも言われる観音巡礼のひとつである。坂東巡礼に関する史料がそれほど多くはないので仔細は不詳のようだが、鎌倉期に源頼朝の信仰に影響を受けて、実朝の代に創設されたと言われるいわゆる「写し巡礼」であることは確かなようである（清水谷、1971：481－482、佐藤、2006：28－37）。近畿圏を中心とする西国観音巡礼文化を鎌倉期の支配層が西国文化に倣って、関八州からなる関東地域（箱根の坂の東側エリアである「坂東」地域）に持ち込もうと企てた産物である。したがって、坂東巡礼は、民衆層が作り上げてきた性質が濃厚な四国遍路などとは性質を異にする。武士階級支配層が政略的に上から押し付けようとした巡礼であるため、不自然に人工的な巡礼コースの地理的難条件等ともあいまって庶民層には十分に浸透しえなかった経緯がある。その後まもなく開創された秩父三十四観音巡礼とオリジナルの西国三十三観音巡礼とを合わせた、いわゆる「百観音巡礼」の部分巡礼としての性格を強くもつことになり、それ自体が独立した巡礼世界としては十分に発展しなかったのである。この「百観音巡礼」の一分枝という特性は、坂東巡礼の今日的特徴のひとつとして連綿として継承され続けており[6]、この点で、坂東巡礼者は「メタ巡礼」（多種多様な巡礼自体の巡礼）としての性格を強く持っている[7]。そ

のことは、ひるがえせば、坂東巡礼に他巡礼の諸要素が少なからず持ち込まれること、つまり、坂東巡礼者の諸巡礼横断的な特徴を示唆していることになる。この特徴は本論での知見を一般化していく上で看過できない点のひとつである。

さらに、関東一円を這う巡礼道1400kmほどに沿って散在する巨大巡礼としての坂東巡礼では、山あり、田園あり、海辺ありという大自然の諸要素の存在が濃密である。現代では、すでに古の巡礼路に沿ってではなく、放射状に拡散する複数の高速道路に沿って車で区切り打ちされることが多いとはいえ[8]、この豊かな自然諸要素の果たす役割は決して小さくないであろう。多様な自然環境が坂東巡礼において占める位置は重要である。

加えて、他方では、坂東マイカー巡礼においては四国遍路のような沿道接待などは少なく、巡礼者同士または沿道住民とのコミュニタス的交流機会に乏しい。その結果、巡礼者個人に閉じた巡礼行という性質の強いものになりがちである。四国遍路よりも、いっそう個人化した巡礼という色彩を帯び、私化したスピリテュアリティ生成の土壌を持っている。

また、坂東各地域で札所として権力中枢から推挙された寺院はどれも各地域の支配層に縁ある寺格の高い大寺院であるため、庶民層からすれば、物見遊山の対象としての性格を強く持つようになった。鎌倉の杉本寺、長谷観音、浅草の浅草寺、埼玉の吉見観音、群馬の水沢観音、茨城の雨引観音、栃木の中禅寺、銚子の飯沼観音など、歴史的な建造物や寺宝など文化的資源の豊かな巡礼サイトに事欠かない。この点では、坂東巡礼は、四国遍路と比較しても、歴史文化的要素の果たす役割が色濃い巡礼として経験される空間を巡礼者に提供している。

以上を掻い摘んで要約すれば、坂東巡礼空間は、①空間的には、自然環境諸要素が豊富な広大な空間条件をもっており、さらには、②時間的には、歴史的文化的遺産の豊富な札所が多数存在して巡礼者を迎え入れているが、一方、巡礼者は、③坂東の百観音巡礼としての性格が強いために他巡礼横断的な一般性が高く、また、④マイカー等の巡礼形態が多く、私化かつ個人化した巡礼の傾向が強いといえよう。

一方、今回実施した坂東巡礼調査は、1997年に実施した第1回目の調査結果を受けて、2006年度に追跡調査を実施したものである。本調査では、近年の巡礼文化の著しい変容を考慮して、スピリテュアリティ化に関連する質問群を新たに設定して、坂東巡礼者の基本的行動とその意識に関する調査を実施した。その調査結果は、『現代における坂東三十三所巡礼』(2007) としてまとめられている。

さて、坂東札所は創設以来、その寺院構成に変化はなく、今回は、調査協力を快諾された後述の4札所に調査票を留め置く調査法で実施された。一般に巡礼者の大量観察調査では、その母集団を目標的にも操作的にも確定することが原理的に困難なため、厳密な意味での無作為調査は不可能である。このため、今回は地域的な偏りを少なくするようコントロールして、春巡礼につぎ典型的な巡礼シーズンである秋に実施された。

採用した調査法は、地点留め置き・応募回収法であるが、調査地点札所は、3番安養寺（神奈川）、10番正法寺（埼玉）、23番観世音寺（茨城）、27番円福寺（千葉）、33番那古寺（千葉）の5札所である。調査期間は、2006年8月下旬～11月下旬の約3ヶ月間であった。

その結果、694票が回収され、うち592票が有効票としてデータ処理に付された。標本の基礎構成について素描するなら、性別では、男性61.1％、女性33.8％で、とくに男性が多いことが特徴的である。これはとりわけ坂東巡礼に顕著な特性である。また年齢では、60歳代が最も多く（32.4％）、50歳代と60歳代で過半数を占めるが、40歳代（9.3％）、30歳代（10％）、20歳代（4.4％）と若年層も決して少なくないことに着目したい。さらに、職業的には、勤め人（40％）、無職（20.6％）、主婦（18.8％）、自営業（9.6％）で、学生も1％程度確認されているが、巡礼文化としては、四国遍路などと比べて「勤め人」が多いことが特筆される。このことが持つ意味は少なくない[9]。

Ⅱ　質問群と林の数量化Ⅲ類

ここでは、上記調査により得られたデータをもとに、林による数量化Ⅲ類を使用して多変量解析からの知見を導出することを試みる。この方法は、言うまでもなく、外的変数（目的変数）を持たない一群の質的変数間の相互関係の構造を解析する多変量解析法の代表的な方法のひとつである。その主な目的は、一群の質的変数間の類似度を解明したり、これら変数を背後から規定していると思われる新しいファクターを発見したりすることを通して、これら質的変数間の関係を定量的に客観的に把握することにある。本分析の場合は、スピリテュアリティに関連すると思われる一群の変数群の特徴解明が問題となる。

他方、本調査におけるスピリテュアリティ関連の設問は、同行者の形態、交通手段、宿泊形態、巡礼動機、宗教意識、巡礼経験内容など多岐にわたる。このうち、本論で扱う質問項目は、第1に、「個を越える存在」に関する設問であるQ11「巡礼中の経験・感覚」と、第2に、スピリテュアリティ一般の特徴として挙げられる「宗教との距離」すなわちQ9－1「宗教・信仰の有無」と、第3に、「神聖なるもの」に対する態度、すなわちQ9－2「宗教心の大切さ」の3つの質問に絞ることにする。

ちなみに、本調査では、「宗教または信仰がある」とした者が47.1％であるのにたいして、「ない」とした者は57.1％であった。にもかかわらず、「宗教的な心を大切だと思う」と回答した者は93.4％にも上っている点には留意しておきたい。

さて、Q9－1では、①「宗教もしくは信仰の有／無」（それぞれ、1, 0をとる）、Q9－2では、②「宗教的心が大切だと思うか／思わないか」（同様に、1, 0をとる）を訊ねたものである。この2つのアイテム変数にたいして、さらに、Q11では、巡礼中それぞれ次のような次元に関して、「新しい経験や感覚を得たか／得ないか」（同様に、1, 0をとる）を訊いたものである。すなわち、1.「人との関わり」　2.「自然との関わり」、3.「神･仏や超越的な存在との関わり」　4.「自分を見つめるこ

と」　5.「文化･歴史を知ること」、がそれである。ここでは、「個を超える存在」として、前述の序で論じた坂東巡礼空間の特性（変化に富んだ広範囲にわたる自然環境、鎌倉期以降の豊かな歴史文化的背景、連綿と続く観音信仰、限られた講巡礼や接待、自分探しの個人化した巡礼など）を勘案して、③人々、④自然、⑤神仏、⑥自己の内面、⑦文化・歴史、の5つの諸相を調査上の操作項目として設定したのである。

これら5つの次元は、それぞれ独立したアイテム変数として考えることができる。したがって、先の2つのアイテム変数（①，②）と合わせて計7つのアイテム変数は、それぞれ、0（非選択）または1（選択）の2値のいずれかをとり、計14個のカテゴリーを持つアイテム・カテゴリー方式による数量化Ⅲ類の検証に付すことができる。

約言すれば、これらの7つの変数のうち、Q9－1（①宗教の有無）、Q9－2（②宗教心の大切さ）はいずれも、宗教ないし信仰にたいする巡礼者の距離を異なる水準から測定しようとする変数群であり、Q11の③人、④自然、⑤神仏、⑥自分、⑦文化･歴史、の5項目は、次元が異なる「個を超えた存在」に関する経験の有無を巡礼行為から読み取ろうとした変数群である。

付言するなら、複数回答方式で上記③～⑦を選択した者の比率は、それぞれ、28.5％、32.7％、35.2％、34.5％、43.3％であった。坂東巡礼では、文化・歴史→自分 → 神仏→自然→人、の順で、巡礼で得た経験（つながり）として選択されていることになる。

以上の枠組みを前提として、ここでは、これらの質問変数群を背後から規定していると思われるファクターに関する見通しと、質問変数群の相互の位置関係を定量的かつ視覚的に把握することを通して、スピリテュアリティ概念の精緻化ないし深化に向けたなんらかの洞察を得ることが目標である。

Ⅲ　数量化Ⅲ類の分析結果：3つの軸と相互関係

前述した諸変数群を林の数量化Ⅲ類にかけた各カテゴリー変数のスコアの結果は、表1のとおりである[10]。ここでは、便宜上第4軸を割愛している。また、各アイテムについて、それぞれのカテゴリーにサンプル数を乗じたものの平均は0となっている。

以下では、以上の計算結果をもとに各軸の解釈をしてみよう。

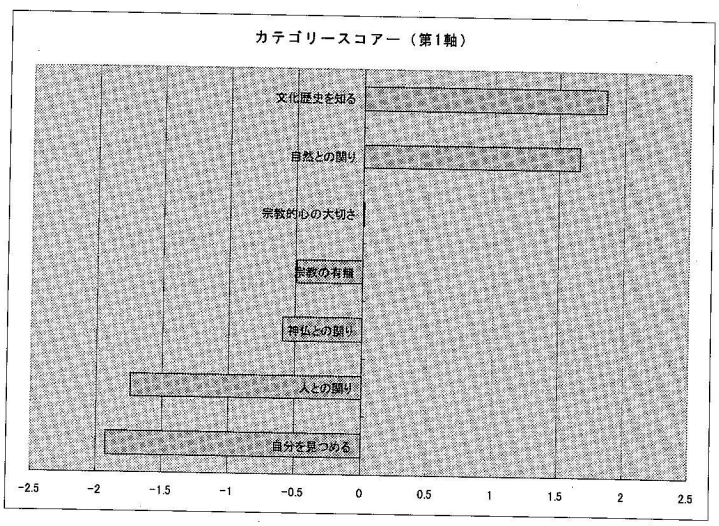
図1は、第1軸をカテゴリー・スコアの大きい順に横棒グラフを描いたものである。ここでは、通常するように、各アイテムについて非選択（ない：0）のカテゴリーは取り上げないものとする。

さて、この第1軸は、どのように解釈されるであろうか。図1から明らかなように、「文化・歴史」項目が最大のプラス値をとり、次に「自然」項目が続き、ついで「宗教的心」の重要性が0に近い値をとり、順次、その他宗教関連項目（「宗教の有無」や「神仏との関り」）がマイナス値に転じ、「人との関り」、そして「自分」項目へとスコアのマイナス値が大きくなるように配置される軸である。このような順序尺度は、上方向へ行くほど時間／空間的環境要素が強く、下方向へ行くほど環

表1　カテゴリー・スコア

カテゴリー		第1軸	第2軸	第3軸
人との関り	ない	0.6589	0.52218	−1.08801
	ある	−1.74448	−1.38748	2.89209
自然との関り	ない	−0.76557	0.73339	0.08382
	ある	1.66012	−1.59038	−0.18184
神・仏との関り	ない	0.30813	−1.36563	0.06805
	ある	−0.59235	2.62513	−0.13088
自分を見つめる	ない	0.92356	0.218832	1.06997
	ある	−1.92286	−0.60027	−2.22773
文化・歴史を知る	ない	−1.30917	−0.37744	−0.22376
	ある	1.85978	0.5362	0.31781
宗教の有無	ない	0.36378	−0.47396	−0.9974
	ある	−0.49471	0.64452	1.35623
宗教心重要性	ない	−0.56524	−5.21223	−0.91638
	ある	0.01641	0.16212	0.02802

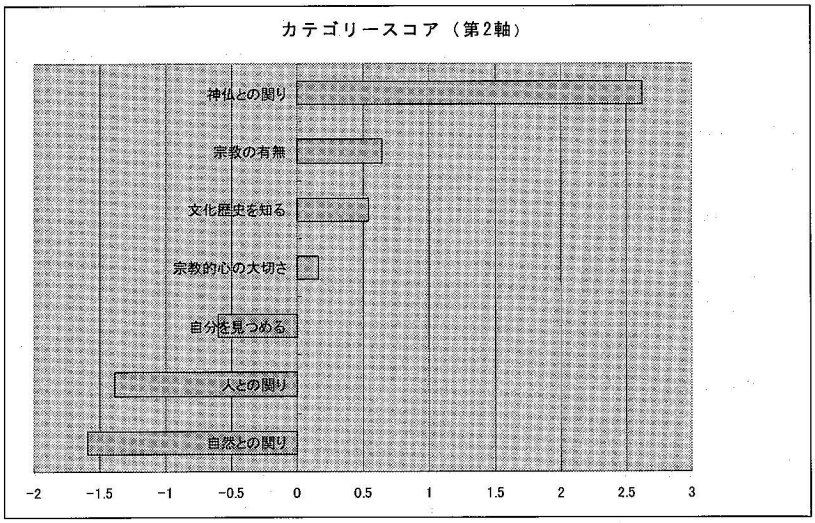
図1　第1軸の棒グラフ（昇順）



境の中で行為する他者や自分などの行為主体が位置する軸と解釈される。すなわち、自然／文化環境と主体エージェントを弁別するような軸と考えられる。また、ここでは、神仏関連の項目は、主体と環境を媒介する位置を占めている。そこで、この第1軸をとりあえず、＜環境・主体弁別軸＞と名づけておこう。宗教的次元を真ん中にして、時間的・文化的・物理自然的世界と人々や自分の人間世界が対置されるようなベクトルを持つファクターである。巡礼者のスピリチュアルな心性は、小さな自分を包み込むような歴史的時間や自然・大宇宙とのつながりという文脈で感得されているのではないだろうか、という解釈が可能であろう。その場合、この両者の「つながり」に介在するのが、宗教的な媒介空間である。

坂東巡礼においては、前節で見たように、巡礼環境の時間次元では鎌倉期以降の歴史的文化に彩

図2　第2軸の棒グラフ（昇順）



られているが、空間次元においても「八溝知らずの偽坂東」「坂東の八溝知らず」という言葉もあるように[11]、きわめて険しい山岳札所もあって霊場の時間・空間軸はスケールが大きい。また、軸中間の宗教的次元においては、巡拝対象が多種多様な形態をとり、三十三の変身をするという変幻自在の観音菩薩とする本尊巡礼である。こうした宗教的系譜が一時的にではあろうが坂東巡礼者を規定している。他方、主体側の極では、四国遍路のような活発な沿道接待もほとんどなく、伝統的な集団講巡礼は激減し、小集団ないし一人巡礼者が約82.5％と大半を占め、巡礼行為の個人化が急速に進んでいる[12]。個人ペースの「自分探し」が主流となっている。こうした両極と中間点の事情を勘案して、巡礼者スピリテュアリティに関する第1軸が解釈される必要があろう。

他方、この＜環境・主体弁別軸＞に関しては、片や、グローバル化によりますます複雑に拡大してゆく近年の社会経済的環境や、地球温暖化等に見られるよう危機的な生命的自然環境がある。片や、これら環境リスクやストレスの高まりの中で、主体的な自己責任的対応と解決を絶えず迫られている小さな行為エージェントがいる。このような個人化と複雑化する環境というコンテキストを想起する必要があるかもしれない。第1軸は、制御不能な強大な環境と微小ながらも希望を見出す必要に迫られている自己を対置する軸とも解釈されようか。

次に第2軸の解釈に移ろう。図2は、第2軸に関するカテゴリー・スコアを昇順に横棒グラフにしたものである。

図2より明白なように、本軸は、上方向へ行くほど、聖的、理念的な宗教的関りが強い経験項目が配置され、神仏との関わりが最大スコアとなる。これらはいずれもプラス値をとるが、逆に、下方に行くほど、＜自分→人→自然＞の順で次第に実在的・客体的・世俗的な事物との関わりが強い項目が配置される軸であると解釈される。したがって、この軸は＜理念・実在弁別軸＞ともネーミ

ングされうる特徴を持っている。また、少し視点をずらしてみるなら、<聖俗弁別軸>のようにも解釈される点がある。もっとも、聖俗弁別軸とするには、「俗」側の指標解釈にやや難のある軸といえるかもしれない。Heelas（2002：357）も言うように、「宗教は世俗に道を譲る、と喧伝されるが、現実の証拠は別途の解釈を支持している」とするなら、スピリテュアリティに着目するパースペクティブから見れば、慎重を要する軸解釈であろう。ここで、スピリテュアリティ論か世俗化論かを問うものではないが、きわめて微妙な解釈の違いが導出される軸ではある。とりあえず、「理念・実在弁別軸」とのかかわりでスピリテュアリティ概念を再考する余地がある、ということをここでは確認しておきたい。その含意は、心身問題にみられるように、理念・実在弁別の軸は、制度的な宗教の地平においても非制度的なスピリテュアリティの地平においても共通してその根底に横たわっている基軸のひとつであろうという点にある。第2軸に関するこれら一群のカテゴリー・スコアが示唆しているものは、このような知見である。

坂東巡礼者の場合、「理念」方向では、多様な形態をとる観音菩薩や「本当の自分」「より高次の自己」といった理念が中心となるだろう。他方、「実在」方向への諸経験としては、坂東巡礼路の不明瞭性から生じる移動順路の問題や宿泊問題、さらには、水分、食料、ガソリンなどの資源確保やトイレ問題などが典型的なものであろう。

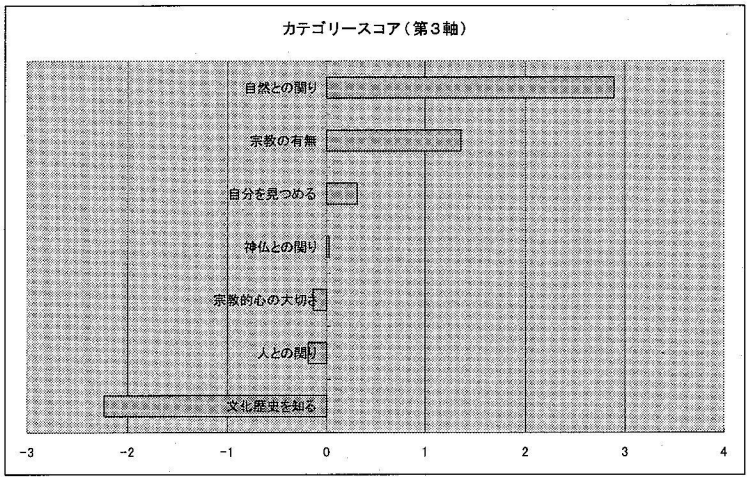
前述したように、大半の坂東巡礼者が「宗教心は大切」としながらも、6割ほどの者が「宗教を持たない」と自認する彼らの一見奇妙でアンバランスなメンタリティを考慮するとき、実在性の高い人間生物学的ファクター的や自然ファクターと、理念性の高い神仏や宗教ファクターの両極次元は、「宗教心は大切」とする媒介的妥協点を設定することで全体的バランスを回復しているのではないか、という解釈も成り立つであろう。伝統的・制度的宗教（教義や組織）からは離脱しているが、抽象的・理念的宗教心を実在的な自己の心の内に持つこと（すなわち、より高次の自己の探求）が重要であると考える両義性の問題がここには伏在しているように考えられる。

他方で、高度情報化文明の中で、理念的・抽象的なバーチャルリアリティが肥大化する一方で、具体的で実在的な生身のリアリティやヴァナキュラーな文脈が色褪せてゆく現代文化のステージにも、この<理念・実在弁別軸>は関連しているようにも思える。スピリテュアリティ系の巡礼者一般に関して言えば、自らの身体による「歩き巡礼」に拘りつつも、固定化した伝統的教義ではなく内面から湧き上がるような抽象的・選択的・シンクレティックな意味経験を求める巡礼ケースが想起されよう。

最後に、第3軸を検討しよう。図3は、第3軸から見たカテゴリー・スコアの棒グラフである。

この第3軸はその解釈がそれほど容易ではない。やや牽強付会のきらいがないわけではないが、それでも読み取れそうなことは、自然・自分（上方）と社会・文化（下方）の対立的弁別である。上方に行くほど、自己から自然に向かう傾向が強い項目が配置される。自然には、外なる自然と内なる自然があるが、この場合、自己の内なる自然（身体）はさらに宇宙的自然へとリンクしている

図3　第3軸の棒グラフ（昇順）



ものと考えれば、ニューエイジ的な高次の自己が超越的な存在へと接合されるとするコスモロジーに適合的な軸の一種と解釈してみよう。さらには、下方に向かえば、次第に他者性や文化・歴史性の性質が強まるような軸である。したがって、自己の内的自然と外的自然へと方向と、他者との関りや文化歴史的な外部世界に向かう方向を弁別している軸と解釈される余地があろう。他方、宗教的スタンスを中に挟んで、「自分を見つめる」と「人との交流」が逆方向に配置される構図は、「自己・他者弁別」軸としての側面もある。したがって、第3軸は、両極端の項目からみれば、「自然・文化対立軸」と見られるし、中位の項目配置から見れば、「自己・他者弁別軸」としてみることもできる。

もっとも、「自己・他者弁別」に関して言えば、坂東巡礼の場合、四国遍路ほど、お接待や同行者同士のコミュニタス的世界は濃密でなく、したがって、先に見たように、直接的な人との交流から得られる経験は他の経験ほど重要視はされない。しかしながら、過去に生きた間接的な他者世界である「文化歴史」に関しては、坂東巡礼経験で得られるもののトップ項目である。自然との関わりについても、ニューエイジ的スピリテュアリティにおいては、「本当の自己」の追求のひとつの終着点が神聖なる大宇宙との一体感にあるとするなら、第3軸は「自然・文化弁別」軸というよりも、「自己・他者弁別」軸と解釈した方がより分かりやすいかもしれない。とはいえ、全体を明確に貫くベクトルが容易に認定できないことから、この第3軸は補助的な軸と位置づけるべきであろう。

さて、これまで見てきたように、数量化Ⅲ類の3つの軸解釈分析の結果、2つのファクター、すなわち＜環境・主体＞ファクター、＜理念・実在＞ファクター、そして補助的な＜自己・他者＞ファクターが基底において作用しているのが、坂東巡礼者のスピリテュアリティ的メンタリティの世界ではないのかという、とりあえず大まかな知見を得ることができたと思われる。坂東巡礼者に見られるスピリテュアリティ、すなわち、「個を超える存在」との神聖な「つながり」の「感覚」は、こ

の3次元ないし3ベクトルが複雑に交錯している場の中で、生じているものではないか。こうした潜在的構図こそ、軸解釈により得られた第一の結果である。だとするなら、これらのファクターがどのように交錯しているものなのかが次に問われなければならない課題である。そこで、以下では、これらファクター間の相互関係（類似度、ポジショニング）について検討してみることにする。

相互関係の分析作業は、カテゴリー群の類似度を検討することによって見ることができる。ここでは、前述した補助的な第3軸を割愛し、第1軸と第2軸からなる座標系へのポジショニングを通して検証してみる。

図4は、第1軸（環境・主体弁別軸）と第2軸（理念・実在弁別軸）をクロスさせた座標軸に各カテゴリーの座標（それぞれのカテゴリースコアー）をプロットしたものである。

さて、この第1軸と2軸のクロス座標系の第1象限は、理念的かつ環境的世界である。理念的な環境世界は、主体外部の「文化・歴史的環境」を指すものと解釈できる。これにたいして第2象限は、理念的かつ主体的な空間である。主体形態の個人的と集合的とを問わず、この空間はいわば創造的で構築主義的な理念世界で、思想・イデオロギーなど、典型的には「世界観」「コスモロジー」の空間であろう。また、第3象限は、主体的で実在的な空間であるから、経済・生活など、典型的には「世俗的人間世界」とも解釈できる。最後の第4象限は、実在的な環境世界であり、「物理化学的自然界」を指すものと考えてよい。

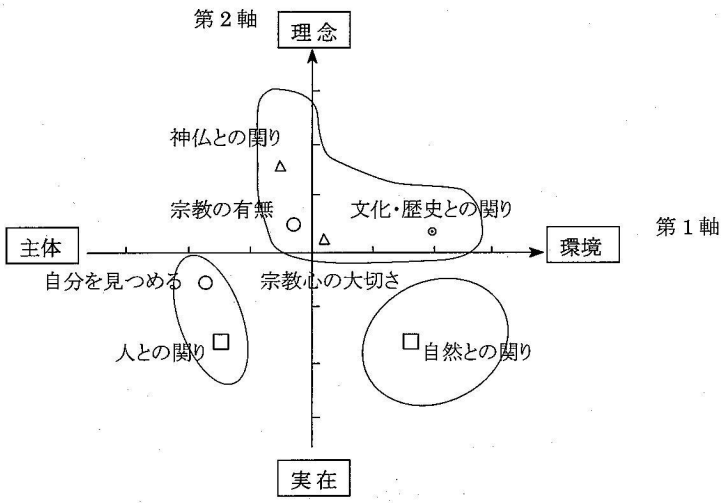
そこで、こうした座標空間に、各カテゴリーがそれぞれの位置を占めていることになる。ここでカテゴリー間の距離が近接したもの同士をひとつのクラスグループとして纏めると、それぞれ曲線で囲まれた3つの領域が形成される。第1グループは、「神仏との関り」、「宗教の有無」、「宗教心の重要性」、そして「文化・歴史との関り」の各カテゴリーからなる。これらは、広く文化的変数としてくくることが可能である。第2グループは、「自分を見つめる」、「人との関り」からなるもので、このグループは自己・他者の社会的／パーソナリティ変数として一括されるだろう。とりわけ、この場合の「自己」とは、日常的な自己というよりも、日常的自己を越える「本当の」「より高次の」の自己を意味しよう。

他方、第3グループは、「自然との関り」のみからなる自然変数としてみることができる。もっとも、「自然」には、前述のように「内なる自然（身体）」と「外なる自然（自然環境・宇宙）」が含まれていると考えることが、スピリテュアリティの場合は重要である。

以上を総括するならば、「環境・主体弁別軸」「理念・実在弁別軸」からなる意味空間においては、1）文化領域、2）社会・自己領域、3）自然領域、の3グループが認定できることが明らかとなる。すなわち、今回調査データが示しているのは、坂東巡礼者のスピリテュアリティを構成する「個を超える存在」は、大別して上記のような3つのグループから成り立っていると見られることである。

さらに、以上の3分野は、坂東巡礼に限らず、四国遍路や西国巡礼などの巨大巡礼においては、同様に見られる構成要素である。とりわけ、四国遍路の場合は、1）約1200年にわたり継承され続

図4　カテゴリーのポジショニング（第1軸×第2軸）



けてきた遍路文化の歴史、2）遍路道や札所や善根宿等に見られる接待文化における他者との交流、3）海沿いの遍路道や山岳・田園・街中等に立地する札所、など、坂東巡礼よりもさらに適合するケースであろう。

Ⅳ　結論と展望

これまで見てきたように、本論では、巡礼者のスピリテュアリティにおける「個を越える存在」に焦点を当てて、坂東巡礼調査のデータを林の数量化Ⅲ類による多変量解析にかけることにより、これを規定していると思われる3つの基底的軸が導出された。すなわち、①「理念・実在弁別軸」、②「環境・主体弁別軸」、③「自己・他者弁別軸」の3ファクターである。これら3つのファクターが、巡礼者のスピリテュアリティを背後から方向付けていると推論されることを検証してきた。今後、この3ファクターそれぞれの内実と、相互にどのように関連しているかがさらに仔細に検討に付される必要があるだろう。

これに関連して、前記①と②の2つのファクターが織り成す次元においては、巡礼者にとって「個を超える存在」に関連するものが、主として、「文化・歴史」、「自己・他者」、「自然」の3グループからなることが示唆される実証的知見が得られた。こうした知見によれば、一般に、「個を超える存在」として、自己の内奥（高次の自己）、他者、集団・組織、制度、国家、理念、文化、歴史、人類、動物、生物、生態系、大自然、宇宙、神仏・・など多様な存在が想定されようが、これらは、いずれもほぼ上記3つのグループのいずれかに帰着される可能性が示唆される。

以上のような洞察は、直接的には現代坂東巡礼者に関するものであるが、すでにⅠ節で指摘したような坂東巡礼者の特性からして、四国遍路をはじめ日本の現代巡礼者一般にもかなりの程度は敷

衍しうるものである。さらには、こうした知見の一部は、巡礼という特定ジャンルの人々に限定することなく、スピリテュアリティの性質をあらわにしつつある人々一般にも適用できる可能性もあるだろう。

Heelasによれば、スピリテュアルな動向は、主として制度的宗教の外部に位置する無神論者などのような世俗化に向かわない一群の人々に見られるのみならず、制度的宗教内にとどまっている人々の一部にも同等の傾向が見られることを二つのHSとしてシンボライズしている(13)。さらに、近代後期の過程においては、この動向がさらにグローバル化してより一般化した社会的趨勢となる可能性を否定できない点もあろう(14)。広範囲の分野にわたったスピリテュアリティに関する仔細な検証が要請される所以である。この意味でも、ますますグローバル化する巡礼者のスピリテュアリティに関する検証作業は重要な課題のひとつといえよう。

注

(1) 本論は、調査報告書『現代における坂東三十三所観音巡礼』(2007) 第Ⅷ章2節「坂東巡礼者とスピリテュアリティ」(坂田) で得られた結果を、さらに仔細に検証し、スピリテュアリティ一般の検討に向けて再考したものである。

(2) これらの動向に関しては、巷にあふれる現代巡礼記の多くが物語っているが、われわれの坂東調査や四国遍路調査においてもこの傾向が明瞭に読み取れる。ちなみに、今回調査では、後述するように「宗教・信仰なし」とするものが、全体の57.1％にも上っている（早稲田大学社会学研究室編　2007年を参照)。

(3) たとえば、カスバートの道（St. Cuthbert's Way）は1990年代半ばに、スコットランド・イングランドの境界地域ウォーキングプロジェクトおよびティル渓谷ツーリズム推進協議会が共同して、7世紀の著名なリンディスファーン修道院長であった聖カスバートが信仰上辿った聖跡を結ぶ道をウォーキング・ツーリズムのために開設したものである（Smith and Shaw, 1997)。

(4) 一般システム論的アプローチは、他水準の諸システム一般の特性を対象とし、システム間の階層構造を解析する目的で展開された視座を持っているので、こうした問題へアプローチするには現在でもなお有力なパラダイムである。「個を超えた存在」の文脈からすれば、Koestler, A.（1968）のホロン論パラダイムにおける「統合化傾向」の議論はかなり良く対応するものであろう。

(5) ニューエイジのホーリスティックで多次元的な諸傾向については、Hanegraaff, W. J. 001)、Hammer, O. らをはじめ、その多様な形態を論じている論文集、Rothstein, M.（ed.）2001、が参考となる。

(6) われわれの調査では、巡礼動機の約1／3（32.1％）は百観音巡礼動機によるもので、「家内安全」「健康」動機についで第3位に位置している。

(7) 必ずしも崇拝対象の種類にこだわらない「メタ巡礼」(個々の札所聖地の巡礼というよりも多様な巡礼コースそれ自体の巡礼）は、近年のグローバルなスピリテュアリティ特性を持つ巡礼者に特徴的な一タイプである。四国遍路でも、一方では、四国遍路に特化してリピーターとなり、100回遍路行を越す伝統的な遍路が珍しくないが、他方では、四国、西国、坂東、秩父をはじめ、その他の仏教巡礼聖地のみならず、サンチャゴ巡礼やルルド巡礼などのキリスト教巡礼地やイスラム教聖地をもめぐる「メタ巡礼」者が近代ツーリズムの進展とともに増加している。ニューエイジに顕著ないわゆる「スモーガスボード」的、多元的、ホーリスティックな特徴といえる。

(8) 今回調査では、約7割（66・9％）の巡礼者がマイカー巡礼者である。

(9) 男性、若年層、有職者が多いことは、スピリテュアルな傾向が増幅しやすいことを示唆している点に留意したい。

(10) 本分析では、山本嘉一郎によるSPSS版GUI数量化理論プログラムを使用した。

(11) 福島、栃木、茨城3県にまたがる二十一番札所の八溝山日輪寺は、坂東巡礼コースの北限に位置する標高1000mを越す難所中の難所である。

(12) 6年ほど前にはそれなりにあった講巡礼（早稲田大学社会学研究室、2000、『現代における坂東観音巡礼と巡礼の道』では、5.5％程度）も、今回調査では激減していることが判明している（早稲田大学社会学研究室、2006、『現代における坂東三十三所観音巡礼』）。

(13) Heelasによれば、現在のスピリチュアリティは、二つのHSに象徴されるという。すなわち、ニューエイジに典型的に見られるHigher Self（高次の自己）と伝統宗教内部に見られる一神論的なHoly Spirit（聖霊）の二つである。Heelas, P., 2002, p. 370参照。

(14) Beckford, J.（2003：109）では、global spirituality の出現について言及されている。

文献

Adam, D. 1997 *Holy Island*. Canterbury Press Norwich

Beckford, J. A. 2003 *Social Theory and Religion*, Cambridge, UK, Cambridge University Press

樫尾直樹　2004「スピリチュアリティ、ある＜つながり＞の感覚の創出―フランス日系宗教の事例―」（伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学』）世界思想社

Koestler, A. & Smythies, J. R (eds.). 1968 *Beyond Reducionism*—New perspectives in the life sciences（池田善昭監訳　1984『還元主義を超えて』工作舎）The Hutchinson Publishing Group Ltd.

河野昌広　2006「現代の四国遍路におけるスピリチュアリティ」（『アジア遊学　八四号―アジアのスピリチュアリティ　精神的基層を求めて―』）勉誠出版

伊藤雅之　2004「新しいスピリチュアリティ文化の生成と発展」（伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学』）世界思想社

星野英紀　1999「現代遍路調査によるその実像―四国遍路にニューエイジ？」社会学年誌四〇号

星野英紀　2004「活性化する伝統巡礼―四国遍路とサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼」（頼富本宏編『聖なるものの形と場』）法蔵館

Heelas, P. 2002 "The spritual revolution:from 'religion' to 'spirituality" in Woodhead L. *et al.* (eds.) *Religions in the modern world, London Routledge*

大谷栄一　2004「スピリチュアリティ研究の最前線―二十世紀の宗教研究から二十一世紀の新しい宗教研究へ―」（伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学』）世界思想社

Rothstein, M. (ed.) 2001 *New Age Religion and Globalization* Denmark, Aarhus University Press

佐藤久光　2006　『遍路と巡礼の民俗』人文書院

清水谷孝尚　1972『観音巡礼－坂東札所めぐり－』文一出版

Smith, R. and Shaw, R. (eds.) 1997 St. *Cuthbert's Way*, Edinburgh The Stationary Office

早稲田大学社会学研究室編　2006『現代における坂東三十三所観音巡礼』早稲田大学社会学研究室

早稲田大学社会学研究室編　2000『現代における「坂東観音巡礼と巡礼の道」に関する調査報告書』早稲田大学社会学研究室

早稲田大学道空間研究所編　2007『10年後の遍路たち』早稲田大学道空間研究所

Wuthnow, R. 2001 "Spirituality and spiritual practice", in Fenn, R. K. (ed.) The *Blackwell Companion to Sociology of Religion,* Oxford: